

日本におけるファシリティドッグの普及のために

第1章 はじめに

第1節 主題設定理由

私は幼いころから家で犬を飼っており、落ち込んだ時や悲しいことがあったときに犬に触れるとそのような気持ちが緩和されると感じていた。このような経験から動物が人を癒すことができるアニマルセラピーに興味を持ち、動物に関わる仕事をしたいと考えていた。また、あるテレビ番組を通して、ファシリティドッグという制度を知った。そして、この制度は世界では広く普及しているにも関わらず、日本ではほとんど普及していないという現状を知った。私は、ファシリティドッグの日本国内での認知度を向上させ、その普及率を高めたいと考え、このテーマを設定した。

第2節 研究方法

本論文では、まず、アニマルセラピーの歴史や効果について書かれた論文、日本とアメリカにおけるファシリティドッグの取り組みや制度を取り上げている記事や論文、小児がんや重い病気を抱える子どもの心理的支援を目的とし、日本におけるファシリティドッグの導入主体となっている NPO 団体シャイン・オン・キッズのホームページなどを参考に、ファシリティドッグへの理解を深める。次に、白梅学園清修中高一貫部の生徒・教員や埼玉県内の病院職員を対象とした調査を参考に、ファシリティドッグの認知度や普及率の向上について考察し、日本でファシリティドッグ制度をより普及させるための方法を提案する。

第2章 ファシリティドッグに関する先行知識

第1節 ファシリティドッグについて

ファシリティドッグとは 2000 年頃からアメリカで始まったとされる制度で、「ひとつの決まった施設で活動する犬」のことである。アメリカのファシリティドッグはこども病院や裁判所、特別支援学級や成人の医療施設など幅広い場所で活躍している。(図 1)

※肖像権、著作権保護、個人情報保護の観点から写真を削除しています。

図1 アメリカの様々な場面で活躍するファシリティドッグ

アメリカで行われているこのような活動は、患者や証言者の心理的負担を軽減することを目的としている。活動頭数に関して、村田・森田（2018）は、「アメリカには盲導犬以外の補助犬育成の世界最大の団体であるケーナイン・コンパニオンズ・フォー・インディペンデンスがあり、年間43頭がファシリティドッグとして輩出されている」と述べている。

1

日本でファシリティドッグの導入を行っている団体は、NPO 法人シャイン・オン・キッズ(旧タイラー募金)のみである。団体の理事長キンバリー・フォーサイスの息子が2歳の時に白血病で亡くなった経験をもとに発足された。キンバリーは、日本の小児がん治療の環境を変えたいと考えていたときに、ハワイ州の病院(Kapi'olani Medical Center for Woman and Children)でファシリティドッグと出会った。彼女は2008年にファシリティドッグ日本導入プロジェクトを立ち上げ、必要な資金を集めるためのクラウドファンディングに成功した。2010年に静岡県こども病院に派遣を開始し、これが国内初のファシリティドッグ導入例となった。2006年にタイラー募金として発足したこの団体はシャイン・オン・キッズに名称を変え、2008年にファシリティドッグの導入を開始してからから2024年までの16年間で6頭の導入に成功している。しかし、そのうち2頭はすでに引退しており、現在日本で活動しているファシリティドッグは4頭である。これら4頭はそれぞれ静岡県立こども病院、神奈川県立こども医療センター、東京都立総合医療センター、国立成育医療センターの4か所の病院に所属、活動している。主に小児科に常駐し、採血、投薬等の治療中の患者への付き添いや病床への訪問、手術室までの同行など、患者とその家族をサポートしている。(図2, 3)

¹ 村田夏子：森田優子.(2018)「こども病院ではたらくファシリティドッグと感染対策 Hospital Facility dog and Infection control」.『モダンメディア』.64巻,11号

※肖像権、著作権保護、個人情報保護の観点から写真を削除しています。

図 2 患者と添い寝する様子

図 3 患者と触れ合いをする様子

第 2 節 アニマルセラピーについて

アニマルセラピーとは、動物と触れ合うことで癒しを得たり、不安を解消したりするなどの精神面における治療を目的として行われる活動である。現在最も多く活動している動物は犬であるが、一番古い伝統があるとされているのはホース・セラピーである。ローマ帝国時代に、戦争により負傷した戦士たちの機能回復のため乗馬をしていたことがアニマルセラピーの始まりであるとされている。このようにアニマルセラピーが始まった当初は精神面の治療目的ではなく、身体機能回復を目的としていた。しかし、18 世紀後半のイギリスでは、心を病んだ人を対象としてウサギやニワトリなどを用いた精神ケアが推進され、さらに、アメリカでは世界大戦による外傷後ストレス障害 (PTSD) を発症した患者に対し、動物を用いた治療を行ったところ、効果的であることが確認できた。これにより、世界中でアニマルセラピーという精神面における治療が広まることとなった。

第 3 節 ファシリティドッグとセラピードッグの違い

セラピードッグとは、アニマルセラピーを行う犬のことである。ファシリティドッグとセラピードッグの違いは以下の 4 つである。

- ① セラピードッグは複数の施設に訪問型で活動するが、ファシリティドッグは一つの決まった病院に専属勤務型で活動する。
- ② セラピードッグのハンドラー²は飼い主が務めるが、ファシリティドッグのハンドラーは看護師資格と 5 年間の臨床経験がある者のみが務められる。
- ③ セラピードッグは対象者の膝の上や腕の中で大人しくすることや無意味にかんだり吠えたりしないなどの一般的なしつけのみが行われるが、ファシリティドッグは生後 2 か月から 2 年間の専門的なトレーニングが行われる。

² ハンドラーとは警察犬やセラピードッグの調教師のことであるが、ファシリティドッグにおけるハンドラーはファシリティドッグとペアを組んで活動する人のことを指す。

- ④ セラピードッグは一般的なしつけをこなすことができれば犬種を問わないが、ファシリティドッグは血統を5代前まで遡り、適性のある犬のみがなることができる。また、ファシリティドッグは忠実さと温厚さが求められるため、盲導犬や警察犬としても活躍しているゴールデン・レトリバーやラブラドルなどの犬種に限られている。

これらのことから、セラピードッグもファシリティドッグも動物を介した心身のケアを目的としているが、ファシリティドッグはセラピードッグに比べ、適性或専門的なトレーニング、ハンドラーの雇用条件が厳しいことが明らかとなった。

第4節 アメリカでの取り組みとその現状

クラウドファンディングサービス「READYFOR」を運営している株式会社 READYFOR が2019年に行った調査では、2016年時点で、アメリカでファシリティドッグとして働く犬は104頭であった。先述のケーナイン・コンパニオンズ・フォー・インディペンデンスでは、年間約43頭のファシリティドッグが輩出されている。また、アメリカでハンドラーになる資格は医療従事者であることのみであり、医療従事者が通常業務とハンドラーの業務を兼任している。加えて、アメリカで働くファシリティドッグは病院の小児科だけではなく、心理的ストレスが大きいとされる裁判所や成人の医療施設、特別支援学級でも活動している。特別支援学級では、学習障害のある子どもが本を読むときの聞き役として寄り添うという役割を担っている。

第5節 日本での取り組みとその現状

先述の株式会社 READYFOR が行った調査では、2016年に日本で働いているファシリティドッグは2頭のみであった。また、NPO法人シャイン・オン・キッズによると、2016年から2024年までの8年間で2頭しか増えていない。ファシリティドッグの導入・維持には年間約1,000万円という多額の費用が必要であり、その費用は、初年度はシャイン・オン・キッズが支払うものの、翌年度以降は病院と支援者で賄われている。さらに、日本でハンドラーになるには看護師資格を持っていること、かつ5年の臨床経験があることが条件となっている。そして、日本では病院外からハンドラーを雇い、専任で雇用する体制をとっている。これらの点がアメリカとの大きな違いである。

現在ファシリティドッグが活動している病院は全国で静岡県立こども病院、神奈川県立こども医療センター、東京都立総合医療センター、国立成育医療センターの4か所のみで

ある。また、犬の負担を配慮し、週末は休みとした完全週休二日制をとっている。さらに、1時間活動したら1時間の休憩をはさむ、休日はドッグランに連れていくなどの対策を取り、犬のストレスケアにも対応している。衛生面に関しては活動前には歯磨き・グルーミング（図4）を行う、予防接種・定期的な血液検査等の検査と診察を受け管理する（図5）、院内感染防止マニュアル（図6）に沿ってクリーン病棟や無菌室に入院している患者には窓越しでの面会にするなどの対策を行っている。これらの対策の結果、シャイン・オン・キッズによると日本でファシリティドッグが導入されてからの約8年間で、アレルギーや感染症に関する問題は一度も報告されていない。

※肖像権、著作権保護、個人情報保護の観点から写真を削除しています。

図4 静岡県こども病院で活動前にグルーミングを行う様子

※肖像権、著作権保護、個人情報保護の観点から資料を削除しています。

図 5 静岡県こども病院におけるファシリティドッグ導入における前提

※肖像権、著作権保護、個人情報保護の観点から写真を削除しています。

図 6 静岡県こども病院の院内感染症対策マニュアル

第6節 先行知識から得られた日本とアメリカのファシリティドッグ制度の違い

ここでは、先行知識から得られた日本とアメリカのファシリティドッグの違いについてまとめていく。まず、アメリカでは2016年から2022年の間で2,027頭増えていることに對し、日本では2016年から2024年の8年間で2頭しか増えていない。次に、アメリカでハンドラーになる条件は医療従事者であることのみだが、日本は看護師資格を持っていること、かつ5年間の臨床経験があることが条件となっている。そのため、アメリカのハンドラーは病院に元々務めていた医療従事者が通常業務と兼業する体制をとっているが、日本は病院外からハンドラーを雇い、専任で雇用する体制をとっている。また、日本は4か所の病院の、小児科のみで活動していることに對し、アメリカのファシリティドッグは病院だけではなく心理的ストレスが大きいとされる裁判所や成人の医療施設、特別支援学級でも活動しており、アメリカの方が日本よりも活動範囲が広い。

以上のことから、アメリカと日本ではファシリティドッグの導入数に大幅な差があり、日本の普及率が極めて低いことが明らかになった。さらに、日本のほうがハンドラーの雇用条件が厳しいことや、体制にも、専任か兼任かの違いがあることも明らかになった。また、活動範囲においても日本は病院の小児科のみだが、アメリカは裁判所や刑務所などの多くの場面で働いていることも明らかになった。

第7節 仮説

得られた先行知識から、日本のファシリティドッグの普及率が低いことに関して、以下のような仮説が考えられる。

- ①ファシリティドッグの活動範囲が狭いこと。
- ②ハンドラーの雇用条件が厳しいこと。
- ③ 高額な維持費が必要であること。
- ④活動範囲の狭さから認知度が低くなっており、新規導入に結びついていないこと。

一方で、アニマルセラピーにおいてはその精神的安定に対する効果が確認されていることや、実際にアニマルセラピーを治療の一環として活用していることから、認知度や普及率は高いと考えられる。次章では、これらの仮説を検証し、ファシリティドッグの認知度や普及率の向上への対策を探っていく。

第3章 調査結果

第1節 白梅学園清修中高一貫部の生徒・教員を対象としたアンケートの調査結果

対象：白梅学園清修中高一貫部 生徒 136人

白梅学園清修中高一貫部 教員 15人 計 151人

調査時期：2025年1月9日（木）～2025年1月11日（土）

調査方法：自由記述式の質問紙を配布・回答

調査内容：ファシリティドッグの認知度や今後の可能性について

以下より、調査結果を記す。

「ファシリティドッグを知っているか」という質問に対し、151人中はいと答えた人は9人で全体の6%、いいえと答えた人は142人で94%であった。（図7）

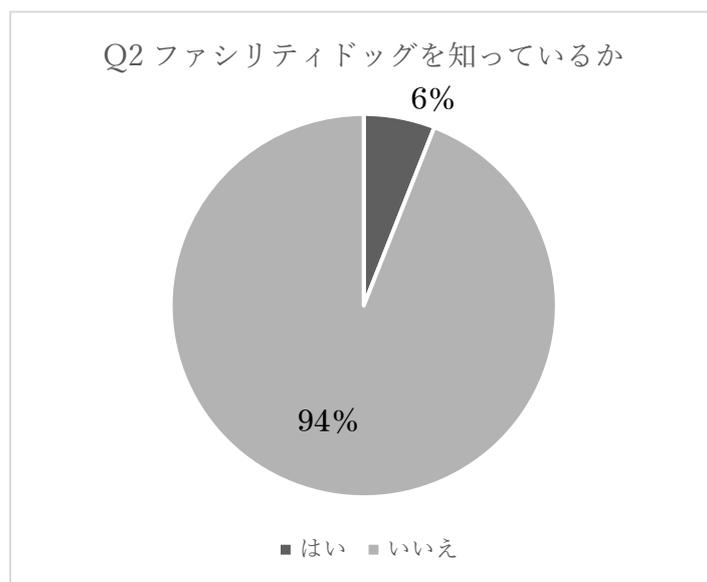


図7 ファシリティドッグを知っているか

ファシリティドッグを知っていると答えた人に、知ったきっかけを質問したところ、YouTubeなどの動画サイトやテレビ番組での企画、ネットニュースの記事などのマスメディアを通して知ったという理由が多かった。

項目4では、ファシリティドッグの説明文を記載し、読後のファシリティドッグに対して抱いた印象について尋ねた。その結果は、肯定的な印象を抱いた人が70%、否定的な印象を抱いた人が7%、未記入が7%、その他が16%であった。（図8）

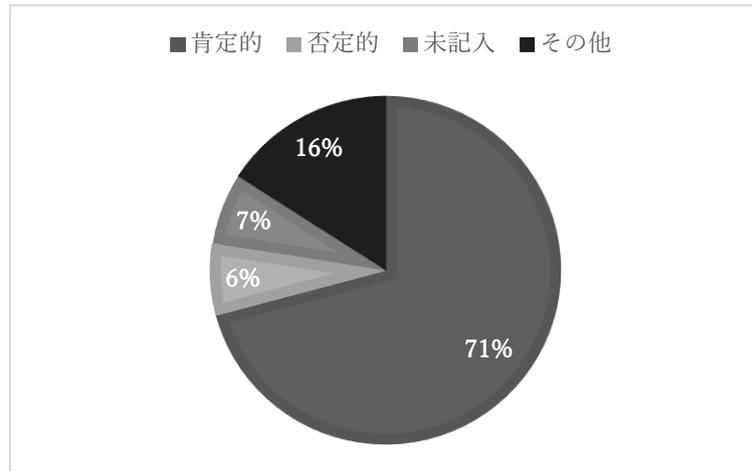


図 8 説明文を読後にファシリティドッグに対して抱いた印象

肯定的な印象を抱いた人は、「動物が人のメンタルケアをできることはいいことだと思う」、「手術前や入院生活は不安なことが多いから安心してするために良い試みだと思う」などの意見が多数挙げられた。一方、「犬の精神的負担や管理・訓練、病院内の衛生環境について心配だ」という否定的な意見も挙げられた。また、犬アレルギーや犬に苦手意識を持っている患者に対する対応を疑問視する意見も見られた。

「自分や親族が入院した際、実際にファシリティドッグを活用したいと感じるかどうか」の問いでは、151 人中はいと答えた人は 119 人、いいえと答えた人は 32 人であった。

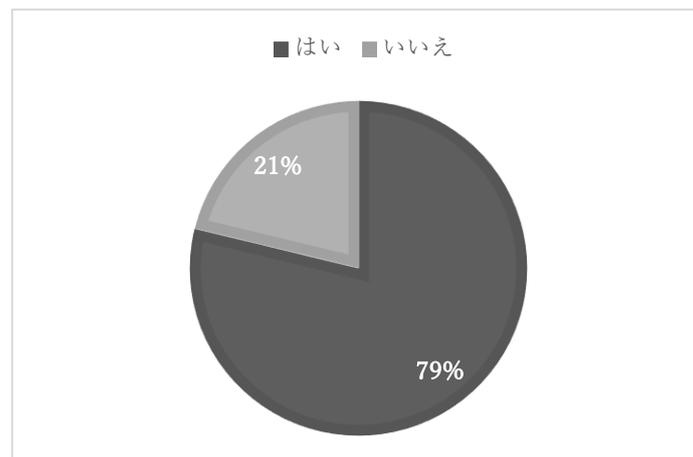


図 9 実際にファシリティドッグを活用したいと感じるか

このことから、ファシリティドッグについて知ったのち、この制度を活用したいと感じる人は約 80%いることが分かる（図 9）。活用したい理由の多くは、入院生活中の不安軽減

や癒しを得たいというものだった。一方で、いいえと回答した人は「犬アレルギーがあるから」、「衛生面に対する不安があるから」という理由が多かった。また、「メリットをそこまで感じられない」という意見もあった。

また、いいえと回答した人には「どのようにしたら活用したいと感じるか」についても質問した。その結果、「衛生環境が整っていることが確認出来たら」、「メリットを感じる事が出来たら」という回答があった。

ファシリティドッグ制度への募金活動への積極性を尋ねた項目では、募金すると答えた人は 151 人中 122 人、募金しないと答えた人は 28 人、未回答の人は 1 人であった。(図 10)

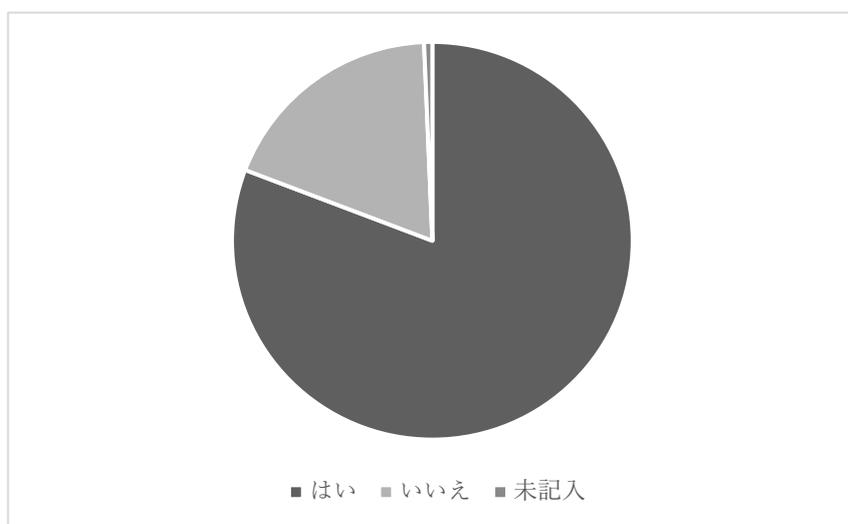


図 10 募金活動が行われていた場合、募金するか

最後に、募金活動に関する理由について質問した。募金すると回答した理由には、「自分が活用したいから」、「少しでも入院中の子供の助けになりたい」、「もっとファシリティドッグが広まってほしいから」というものが多く挙げられていた。募金しないと回答した理由には、「ファシリティドッグに対する詳しい知識がないから」や、項目 6 と同様に「メリットを感じられないから」というものが多かった。

第 2 節 埼玉県内の病院職員を対象とした聞き取り調査結果

対象：埼玉県内の病院職員 看護師 1 人

この病院では、2019 年より病院利用者を対象にアニマルセラピーを導入している。今回、先方の希望により病院名は匿名とする。主に内科・精神科を診療している私立病院である。

調査時期：2025 年 1 月 21 日（火）～2025 年 2 月 2 日（日）

調査方法：メッセージアプリを利用した聞き取り形式の調査

調査内容：ファシリティドッグやアニマルセラピーについて医療従事者の立場からの意見について

以下より、アンケートの調査結果を記す。

「アニマルセラピーを導入したきっかけ」についての項目では、「病院長からの提案で動物介在治療の一環として単発で導入したこと」「初年度は年1回だけだったが、効果が確認できたため、その後2年は年2回実施した」という回答が得られた。

「アニマルセラピーを導入することによるメリットとデメリット」についての項目では、まずメリットとしては、「目が見えなくても感触で体験できる」、「患者がペットを飼っていたころを思い出して喜んだり、涙ぐんだりなど入院生活では見られなかった感情を見ることが出来る」などが挙げられた。また、「普段暴力的な患者が穏やかに接した」、「動かしにくい方の手を使って犬を撫でようとした」、「犬が撫でると喜ぶ場所を思い出して撫でた」などという事例もあったと回答した。デメリットとしては、「休憩時間に散歩や排泄をさせるスペースが必要である」、「患者とスタッフのアレルギーの有無や好意が確認できないと病棟内で実施することが難しい」などが挙げられた。

「医療現場に外部からの動物を導入することに対する抵抗感の有無」についての項目では、「患者のペットは入館禁止のため、患者や患者の家族からの不満に対する恐れはあったが、アニマルセラピーの導入そのものには抵抗感はなかった」という回答であった。

「今後もアニマルセラピーを活用していきたいか」の項目では、「メリットがデメリットを上回るため、状況が許せば活用していきたい」という回答であった。

「ファシリティドッグという制度を知っているか」の項目では、「名前は知らなかったが、存在は知っていた」という回答で、医療従事者でもこの制度を知らない人がいることが明らかとなった。

「ファシリティドッグの説明を読み、この制度について医療従事者の立場から思うことは何か」についての項目では、「患者の不安や精神面の安定につながるのであれば有意義であると思う」、「入院生活という受動的になりやすい環境において能動的になれる」など、肯定的な回答であった。

「今後の可能性について、小児科以外での導入が可能かどうか」についての項目では、「コスト面や動物のストレスなどの条件がクリアすれば可能であると思う」という回答で

あった。

「ハンドラーの雇用条件の説明を読み、自身がハンドラーをやってみたいと感じるか」についての項目では、「患者が穏やかになり、笑顔が見られる様子を間近で見る機会があったため、若いころに知っていたら興味を持ったかもしれない。しかし、ハンドラーの条件が厳しいことに加え、研修や試験があることを想定するとハードルが高いと感じる」というやや否定的な回答であった。

第3節 アンケート結果から分かったこと

2つのアンケート結果から以下のことが明らかとなった。

- ・ファシリティドッグの認知度が極めて低い。
- ・ファシリティドッグに対して肯定的な印象を抱いている人や、広く普及してほしいと感じている人が多く存在する。しかし、アレルギーや衛生環境に関して不安視する意見も存在している。
- ・募金活動に対して積極的な人が多く存在する。一方で、ファシリティドッグに関する知識や効果などの情報量の少なさから非積極的な意見を示す人もいる。
- ・アニマルセラピーなどの動物介在療法では患者の表情や行動に変化が起き、治療として効果的である。
- ・アニマルセラピーを行うには、患者とスタッフのアレルギーの有無や好意が確認できないと病棟内で行うことは難しい
- ・ファシリティドッグにおいてもアニマルセラピーと同様の効果が期待できる。
- ・ファシリティドッグは小児科以外でも導入することができる可能性がある。
- ・ハンドラーの雇用条件が厳しく、ハードルが高いと感じる人もいる。

第4節 考察

認知度が極めて低いことは、日本におけるファシリティドッグの導入数の低さと比例すると考えられる。また、アレルギーや衛生環境に関して不安視する意見が存在するが、これも認知度が低いことや取り組みについて詳しく知る機会が少ないことにより、実際の結果が知られていないためであると考えられる。さらに、募金活動の認知度の低さもファシリティドッグ自体の認知度が低いという同様の原因であると考えられる。新規ハンドラーの数が増えないのは、看護師資格を所有している、かつ5年の臨床試験経験があるものと

いう雇用条件が厳しく、ハードルが高いことが原因の一つであると考えられる。

第5章 まとめ

本論文では日本におけるファシリティドッグの普及率を高めるための方法を探るために、書籍や論文、NPO 団体のホームページなどを参考とし、ファシリティドッグとアニマルセラピーに対する理解を深め、それぞれの歴史や相違点を明らかにした。また、アメリカと日本の取り組みと現状の違いについて比較調査を行った。その結果、導入数に大幅な差があり、日本の普及率が極めて低いこと、ハンドラーの雇用条件が厳しいこと、高額な維持費が必要であること、日本の活動範囲が狭さから認知度が低くなっており、新規導入に結び付いていないことが明らかとなった。

これらより活動範囲や導入数を増やし、普及率を上げるためには認知度を上げる必要がある、ハンドラーの雇用条件が厳しいことには医療従事者からの意見を聞き、条件改善の必要性を確認するべきである、高額な維持費を賄うためには募金活動が効果的である、という仮説を立て、白梅学園清修中高一貫部の生徒と教員を対象にファシリティドッグの認知度や今後の可能性に関するアンケートを、埼玉県内の病院職員を対象にファシリティドッグやアニマルセラピーについて医療従事者の立場からの意見に関する聞き取り調査を実施した。その結果、日本におけるファシリティドッグの普及が進まない原因として、認知度が極めて低いこと、ハンドラーの雇用条件が厳しいこと、高額な維持費が必要であるが募金活動に対して十分な結果が得られていないということが挙げられることが明らかとなった。

以上の研究調査より、ファシリティドッグの認知度や普及率向上の方法案として以下のことを提案する。

- ① Instagram や YouTube などの SNS や、テレビ番組を通した広告活動を積極的に行う。
- ② 精神科や通信制の学校にも導入することで活動範囲を拡大する。
- ③ ハンドラーの雇用条件を見直す。

まず、認知度が極めて低いことに対しては、Instagram や YouTube などの SNS や、テレビ番組を通した広告活動を積極的に行っていく必要がある。また、募金活動が行われており、活動に積極的な人が多くいるにも関わらず十分な結果が得られないのは認知度が低いことが原因の一つであると考えられるため、同様の対策により効果が期待できる。さらに、精神科や通信制の学校にも導入することで活動範囲が拡大され、より多くの人がある存在

を知るきっかけになると考えられる。精神ケアにおける効果が確認されていることから、患者の精神安定や不登校解消にも効果が期待できる。ハンドラーの雇用条件が厳しいことに対しては、雇用条件の見直しが必要である。看護師資格を所有しているため、医療知識に関しては十分であることや、盲導犬や警察犬の訓練期間が1年半ほどであることから、ファシリティドッグでも同様の期間か医療現場であることを考慮すると2年半ほどで充分であると考えられる。これらのことから、認知度を上げるためにSNSやマスメディアを活用した広告活動を積極的に行うこと、活動範囲を拡大すること、ハンドラーの雇用条件を見直すことが、ファシリティドッグの認知度や普及率の向上につながると考えられる。

ファシリティドッグという制度や取り組みの認知度が向上し、日本におけるファシリティドッグの普及が進み、より多くの人々がこの制度を活用して入院生活中の不安を癒すことができることを願う。

【資料：白梅学園清修中高一貫部の生徒・教員に行ったアンケート】

日本におけるファシリティドッグの普及のために

Q1 学年、年代を教えてください。

1年・2年・3年・4年・5年・6年・20代・30代・40代・50代・60代

Q2 あなたは、ファシリティドッグを知っていますか。

12月上旬に行われた中間発表を通して知った場合は「いいえ」に○をつけてください。

はい ・ いいえ

「はい」と答えた方はQ3以降の質問、「いいえ」と答えた方はQ4以降の質問にお答えください。

Q3 2で「はい」と答えた方に質問です。

ファシリティドッグについて知っていることをお書きください。

--

何を通して知ったのか、知ったきっかけをお書きください。

--

Q4 ファシリティドッグとは、「一つの病院に常駐し治療のサポートをする犬のことです。

主に小児科で勤務しており、精神面のケアを目的として採血や検査など治療中の付き添いや病床への訪問、手術室の前まで同行するなどの活動を行う犬」のことです。

上記の説明を読んでファシリティドッグに対して抱いた印象を書いてください。

--

Q5 自分や親族が入院した時、ファシリテッドッグを活用したいと感じますか。

はい ・ いいえ

Q6 5で回答した理由は何ですか。

「はい」と答えた方

「いいえ」と答えた方は理由とどうしたら活用したいと感じるのかをお書きください。

Q7 日本においてファシリテッドッグが普及しない原因の一つとして高額な管理費がかかるということがあります。

この問題を解決するための募金活動があった場合、募金をしたいと感じますか。

はい ・ いいえ

Q8 7で回答した理由を教えてください。

質問は以上です。ご協力いただきありがとうございました。

【資料：埼玉県内の病院の職員に行った聞き取り調査】 ←

←

私は学校の授業の一環で「日本におけるファシリティドッグの普及のために」というテーマで論文を執筆しています。ファシリティドッグやアニマルセラピーについて医療従事者の立場から、ご意見をお聞かせください。ご協力をよろしくお願いいたします。 ←

←

質問事項 ←

- ・アニマルセラピーを導入したきっかけ。 ←
- ・アニマルセラピーを導入することのメリット・デメリット。 ←
- ・医療現場に外部からの動物を導入することに対して抵抗はなかったのか。 ←
- ・今後もアニマルセラピーを活用していきたいか。 ←
- ・ファシリティドッグという制度を知っているか。 ←

←

ファシリティドッグとは、「一つの病院に常駐し治療のサポートをする犬のことです。主に小児科で勤務しており、精神面のケアを目的として採血や検査など治療中の付き添いや病床への訪問、手術室の前まで同行するなどの活動を行う犬」のことです。 ←

- ・この制度について医療従事者の立場から思うこと。 ←
- ・小児科以外での導入は可能かどうか。 ←

←

日本でハンドラーになるには看護師資格を持っていること、かつ5年間の臨床経験があることが条件となっている。 ←

- ・ハンドラーをやってみたいと思うか。その理由は何か。 ←

【参考文献・参考資料】

NPO 法人シャイン・オン！キッズ「ファシリティドッグプログラム」 <
<https://sokids.org/ja/what-we-do/hospital-facility-dogs/>> (2024年10月8日閲覧)

READFOR「君がいるから頑張れる。病気と闘う子供達にファシリティドッグを」 <
<https://readyfor.jp/projects/facilitydog/announcements/112583>> (2024年1月31日
閲覧)

GLOBAL EDGE「ファシリティドッグとともに子どもと家族の病闘を支える」 <
<https://www.jpower.co.jp/ge/66/opinion/index02.html>> (2024年10月8日閲覧)

国立成育医療センター「ファシリティドッグマサの部屋」 <
<https://www.ncchd.go.jp/hospital/support/facilitydog/#:~:text=%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%B7%E3%83%AA%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%89%E3%83%83%E3%82%B0%E3%81%AF%E3%80%81%E7%97%85%E9%99%A2%E3%81%A7,%E7%99%82%E9%A4%8A%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%82%8F%E3%82%8A%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>> (2024年10月10日閲覧)

READYFOR「入院する子供たちを笑顔に！ファシリティドッグ育成基金 2024」 <
<https://readyfor.jp/projects/facilitydog7>> (2024年1月7日閲覧)

Assistant Dogs International 「会員統計」 <
<https://assistancedogsinternational.org/members/adi-member-organization-statistics/>> (2024年1月7日閲覧)

村田夏子：森田優子.(2018)「こども病院ではたらくファシリティドッグと感染対策
Hospital Facility dog and Infection control」.『モダンメディア』.64巻,11号

Yuko,Morita. The Japanese Journal of Pediatric Hematology/Oncology. vol 54(5).,

村田夏子・森田優子.(2019)「日本のこども病院ではたらくファシリティドッグと感染対策」.
『環境感染誌』.vol.34, no.2, p.75-82.

NPO 法人日本アニマルセラピー協会「アニマルセラピーについて」 <
<https://animal-t.or.jp/html/about-animaltherapy/more-animaltherapy.html>> (2025年1月20日閲覧)

社会福祉法人日本介助犬協会「Assistance Dogs International の認可団体となりました！」
<
<https://s-dog.jp/archives/report/2463>> (2025年1月22日閲覧)

NPO 法人日本アニマルセラピー協会「アニマルセラピーとは」 <
<https://animal-t.or.jp/html/about-animaltherapy/more-animaltherapy.html>> (2025年1月22日閲覧)

宮川浩樹.(2005)「アニマル・セラピーって……？—動物介在活動総論として—」.『帝塚

山大学心のケアセンター紀要』. 1 号. p. 39-44